

『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』創刊に寄せて

学院長 楠 本 史 郎

2008年度の北陸学院大学開学にともない、新たに「北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要」を創刊します。

1. この「研究紀要」は、以前の「北陸学院短期大学研究紀要」を受け継ぎます。根本精神は変わりません。創立者 M. ヘッセルの愛した「主を畏れることは知恵の初め」との聖句が建学の精神であり、同時に「研究紀要」の根本精神です。この聖句は旧約の詩編 111:10 と箴言 1:7、9:10 に出ます。原語では多少、用語が異なりますが、意味上の違いはありません。いずれにも出る「畏れる」の語が重要です。旧約に頻出し、とくに「神を畏れる」は重要表現です。人が神の前で自らを不完全な者と自覚します。この神への畏れが、真理探求者に求められます。

現代科学は人間至上主義に陥り、人が知識を自由に用いることを前提しているように見えます。しかし実際には環境破壊や「核」、遺伝子操作など、深刻な問題が生じています。神への畏れを取戻し、謙遜に真理探求に取り組むことが求められます。

ちなみに以前、M. ヘッセルが愛した聖書テキストは箴言 1:7^aとされていましたが、北陸学院大学ヘッセル記念図書館所蔵の彼女の愛用聖書には、詩編 111:10^aに下線が付されています。そのため『北陸学院百年史』は詩編 111:10^aを北陸学院聖句としました。また 2008 年現在、大学玄関に掲げられている額の聖句は箴言 1:7^aです。

2. 大学は、真理を探求する学問の場です。研究の結果が発表され、議論を経て確定されて、学問と社会に貢献することができます。この「研究紀要」は、その発表の場の一つです。

時に「宗教は科学的探求を阻害する」と言われます。しかし科学史は、唯一神教文化圏で科学が発展したと指摘します。そこでは自然は、人間の知を超えた神的存在ではなく被造物です。人間の知的探求が可能とされます。とくにキリスト教世界では自然は「第 2 の聖書」とされ、その探求により、創造者なる神を知ることができると信じられました。この確信が科学の発展を支えました。

「知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、本当に重要なことを見分けられるように」(フィリピ 1:9-10)とあります。中世神学者アンセルムスは「信仰は知解を求める」と語っています。聖書の信仰が知識の探求を求めます。キリスト教を土台とする北陸学院大学がこの「研究紀要」によって知を追求することは、神から与えられた重要な使命です。

3. 大学は研究機関であるとともに教育機関でもあります。北陸学院は、幼稚園から大学まで切れ目なく続く総合学園です。この「研究紀要」は学院すべての教職員および関係者に開かれています。日頃の教育活動のなかで問題意識を持ち、研究課題とし、探求に取り組みます。そこに、教育の進歩が生まれます。知識、学問が実践へと結び付きます。地域社会に貢献することができます。

「愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」(エフェソ 4:15)。真理は、神と他者への愛に根ざしてこそ、豊かな実を結びます。とくに教育現場にあっては、すべての真理探求が「愛に根ざす」行動であってほしいものです。真理への誠実と、学生・社会への愛、両者によって研究と教育がしっかりと結び合うことでしょう。

願わくは、神が本誌を祝福し、学院に集う一人一人の研究の熱意を燃え立たせてくださるよう、またその熱意が清められ、み心にかなうものとしてくださるよう、園児・児童・生徒・学生の人たちや地域の人々と真理を分かち合い、喜びをともにさせてくださるようにと祈ります。

(くすもと・しろう)